NAIST ANNUAL REPORT 2026



だから、もっと近くなる。

特集「J-PEAKS本格始動！」
研究者たちの横顔
財務情報 -Financial Report-

国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学
NARA INSTITUTE of SCIENCE and TECHNOLOGY

CONTENTS

04 学長メッセージ

05 NAIST最前線

06 J-PEAKS 本格始動！

12 Pick Up! 電子ラボノート

14 NAISTopics

16 話題のヒト／コト

18 NAIST 日々アップデート中…

19 NAIST探訪

20 Campus Walk

26 研究者たちの横顔

32 私たちが好きな理由

33 NAIST財務情報

34 財務情報 -Financial Report-

40 NAISTを応援するカタチ

42 編集後記

43 Publications



MESSAGE

学長メッセージ

奈良先端大は、「けいはんな」という愛称で知られる関西文化学術研究都市の中核機関の一つとして、1991年に設立されました。従来の国立大学とは異なり、先端科学技術分野に特化した、しかも学部を持たない独立大学院というその設計思想は、科学技術研究と高度専門人材育成という本学のミッションに最適化されたものでした。

「科学技術」は日本語では一語として扱われることが多いのですが、本学の英語名称“Nara Institute of Science and Technology”で示されているように、Science（科学）とTechnology（技術）の両方を追求しているのが奈良先端大です。科学は技術を支え、技術は科学のさらなる発展を導く――互いが織りなす営みは、今を生きる個人そして社会のwell-beingだけでなく、次の世代のwell-beingの実現を目指すためのものです。

例えば、文部科学省のJ-PEAKS（地域中核・特色ある研究大学強化促進事業）に採択された本学では、わが国が直面する生産年齢人口の縮小という課題に対する先導的な取組を昨年度からスタートさせています。J-PEAKSにおける研究の自動化・自律化、データの利活用をさらに進化させ、拡大するための研究基盤を整備することで、学内のみならず地域や社会のイノベーションに貢献するEPOCH（先端研究基盤刷新事業）に本学が採択されたことも、このアニュアルレポートでご報告するニュースです。

「NAIST ANNUAL REPORT 2026」では、科学・技術研究、さらには産業界や地域との「共創」に取り組む研究者の姿やその舞台である本学のキャンパスの様子などもご紹介しています。奈良先端大と共に未来の創造に取り組んでくださる皆様とのコミュニケーションの一助となれば幸いです。



塩﨑 一裕

奈良先端科学技術大学院大学長。

実は手相は「ますかけ線」。

NAIST 最前線

わかるから、もっと近くなる。



1 | J-PEAKS本格始動！

Pick Up! 電子ラボノート

2 | NAISTopics

3 | 話題のヒト/コト

4 | NAIST日々アップデート中…

J-PEAKS本格始動！

「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」とは、日本全体の研究力を向上させ、新たな価値創造を促進するために、大学の強みや特色を生かした研究力強化を支援する事業です。文部科学省が推進し、日本学術振興会（JSPS）が実施しています。本学は2024年度に採択され、2025年度から本格的な事業の実施が始まりました。

人口減少が進む日本では、研究・開発を担う人材の減少が大きな課題となります。本学は、J-PEAKSにおける10年後の大学ビジョンとして「研究シーズの社会実装をデジタル技術で推進し、国際連携の下で人口減少社会の持続的発展に貢献する大学」を掲げ、その実現に向け、「人材」と「研究の進め方」の両面から、2つの戦略に沿って様々な取り組みを進めています。

本特集では、これまでのJ-PEAKSの歩みと、各戦略の概要や取り組みをご紹介します。あわせて、これまでに大きく進展した取り組みの一つである「電子ラボノート」について、2人の先生の対談を通してご紹介します。

2024

4月1日 始動

7月29日 申請

9月
J-PEAKS取組内容紹介動画
「人口減少社会に挑む」
奈良先端大が提案する未来の大学と社会　YouTube公開



日本語版
https://youtu.be/9paHylXVsso?si=Rob5UYlQAzBIZdrQ

英語版
https://youtu.be/SP9SZ2-TE8U?si=n_cbpRCYuzFoR8h4

10月1日
- J-PEAKS推進会議設置
- 研究・イノベーション推進機構設置
- 国際連携・人材開発推進機構設置

10月
本学のJ-PEAKS事業を広く認知していただくため、ロゴマークを作成

NAIST J-PEAKS

11月14日
伴走チームによるサイトビジットを実施

J-PEAKS事業に採択された大学が効果的に取り組みを進められるよう助言・提案を行う伴走チームによるサイトビジットを実施。伴走チームのほか、情報共有を目的として、他の採択大学のリエゾンやリエゾン代理も参加しました。
当日は、学長をはじめとする執行部との意見交換や、学内施設の視察を通じて、本学の事業の進捗状況や課題を共有しました。また、本学からの事業説明に対して、学生のキャリア支援、研究のデジタル化、若手教員の育成など、多岐にわたるテーマについて活発な質疑応答が展開されました。



2025

1月24日 採択

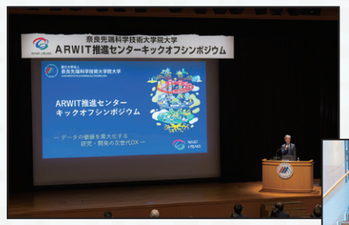
4月1日
ARWIT推進センター設置

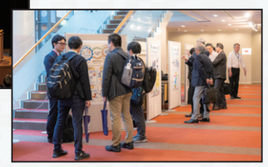
4月
外国籍博士人材の採用・育成サロン（TRI-PhD SALON）立ち上げ

外国籍博士人材の採用・育成サロン TRI-PhD SALON

https://www.naist.jp/oist/tri-phd/

4月22日
ARWIT推進センターキックオフシンポジウムを開催





ARWIT推進センターのキックオフシンポジウム「データの価値を最大化する研究・開発の次世代DX」を開催。本シンポジウムは、ARWIT推進センターが目指す姿や、J-PEAKS事業を通じて構築される研究基盤・リソースの情報を共有し、それらを活用した研究推進や社会実装の具体的な方向性を参加者とともに考える場として、企業や研究機関等に所属する6名の講師が、先進的な取り組みを紹介しました。当日は企業関係者を中心に、学内外から238名が参加しました。

10月23日
NAIST×J-PEAKS キックオフシンポジウム開催

J-PEAKS事業のキックオフシンポジウム「先端科学技術でリデザインする人口減少社会-あなたとNAIST-J-PEAKSの共創で拓く未来-」を開催。本学の10年後の大学ビジョンを紹介し、その実現に向けたアプローチを学内外の研究者・企業・地方自治体・官公庁と共創する場として、当日は学外から84名、学内から174名が参加しました。本学のJ-PEAKS事業の紹介に加え、一般社団法人人口減少対策総合研究所・理事長の河合 雅司氏による基調講演や、パネルディスカッションが行われました。



11月
NAIST J-PEAKS ホームページ公開
https://www.naist.jp/research/j-peaks.html

4月1日
生駒市との包括連携協定を更新
J-PEAKSと連動したまちづくりを協定内容に追加

8月1日
NAIST電子ラボノート コンソーシアム設立
https://www.naist.jp/research/arwit/eln.html

会員募集中！

1

東南アジア諸国からの戦略的な人材リクルートと育成

戦略1は、東南アジアを中心に優秀な留学生・研究者を受け入れ、国際協働教育や多様な文化・価値観が交わるキャンパスでの学びを通じて、国際的に活躍できる研究人材へと育成し、国内企業への就職・定着の支援を行う取り組みです。

こうした「受け入れる」「育成する」「送り出す」の3つのサイクルを通じて、本学の研究力・教育力を国内外に可視化し、大学院大学としての知名度を高めることで、さらなる優秀な留学生・研究者の獲得へとつながる好循環を生み出します。

受け入れる

東南アジア諸国（インドネシア、タイ、マレーシア、ベトナム、フィリピン）から意欲と能力の高い留学生を継続的に受け入れています。東南アジアの大学・研究機関との連携を強化し、留学説明会や国際合同シンポジウム、研究室マッチングなどを通して本学で学ぶ魅力を発信していま す。

これまでの取組

インドネシア国家研究イノベーション庁（BRIN）と協定を締結し、研究・教育の連携を強化しました。また、本学はインドネシア政府が海外留学を支援する奨学金制度「LPDP」の派遣先大学リストに掲載され、優秀な留学生を継続的に受け入れる体制を整えました。





本学においてカセサート大学（タイ）との共催で第1回J-PEAKS国際合同シンポジウムを開催するとともに、タイにおいて第3回J-PEAKS国際合同シンポジウムを開催しました。



NAISTマレーシア同窓会の立ち上げに合わせて、マレーシアにおいてキックオフシンポジウムおよび第2回J-PEAKS国際合同シンポジウムを開催しました。

育成する

留学生と日本人学生が共に学ぶグローバルキャンパスの環境を生かし、多様な文化や価値観を理解する人材を育成しています。外国人教員の採用や欧米トップ大学院との国際協働教育、国際学生ワークショップなどを充実させるとともに、学生を海外の大学や国際学会へ派遣することで、国際経験を積み、世界で活躍するための視野と人的ネットワークを育みます。

これまでの取組

バイオサイエンス領域では、UC Davis（アメリカ）、中国科学院と連携した国際学生ワークショップを開催しました。学生が英語で研究発表や討論を行うとともに、多様な文化・価値観に触れながら交流を深め、国際性の涵養と人的ネットワークの拡大につながる機会となりました。





マレーシア出身で本学修了生でもあるChek Min Fey氏を、新たな研究室を率いる准教授として採用しました。地球環境や社会課題の解決をテーマとした国際的な研究・教育環境の充実を進めています。

海外からのインターンシップ生や研究者の受け入れ拠点となる「NAIST拾薪寮」（奈良市中山町）が開所しました。飯田グループ 株式会社飯田様から社員寮をご提供いただき、本学初のキャンパス外の国際交流拠点として活用しています。



こんな取組も…





夏祭りを開催しました。運営をサポートする学生を募集したところ、留学生・日本人学生あわせて13名が参加し、準備から片付けまで主体的に関わってイベントを盛り上げてくれました。

送り出す

国際的な研究力と日本の社会・文化への理解を兼ね備えた人材を国内企業へ送り出しています。留学生への就職支援を強化するとともに、企業との交流やマッチングの機会を充実させることで、国内企業への就職・定着を促進し、日本社会で活躍する高度専門人材の輩出を目指します。

これまでの取組

本学と沖縄科学技術大学院大学（OIST）が連携し、外国籍博士人材の国内企業への採用・育成・定着を促進する産官学プラットフォーム「TRI-PhD SALON」を立ち上げました。大学・企業・行政の対話を通じて、外国籍博士人材が日本社会で活躍できる環境づくりを進めています。





留学生の国内企業への就職・定着を促進するため、キャリア支援体制を強化しました。専門スタッフを拡充し、就職相談や企業とのマッチングなど、きめ細かな支援を進めています。

MESSAGE

NAISTには2つの強みがあります。1つは留学生・修了生が国別で同窓会を作り、修了後の生活の様々な面での相互扶助・協力やネットワーク作りに役立っていること。もう1つは、東南アジア出身の教員が国際チームを作って、連携校との交流や共同研究をリードしてくれていることです。これらの強みは、日本と東南アジアの人材育成と先端研究推進の循環型システムとしてNAISTの中ですでに機能しているものですが、J-PEAKS事業において、留学生の受け入れ・国際的な人材育成・修了生の日本への定着を大学全体で取り組むことで、このシステムをもっと太く、より強靭で輝くものに育てていきます。

真木 壽治
国際連携・人材開発推進機構副機構長。実は猫派。現在、アメリカンショートヘアの老嬢（18歳）と暮らす。



2 自律的研究強化・社会実装システム（ARWIT）の構築と共有

戦略2は、AIやロボティクスを活用した研究の自動化と、研究データの安全な共有・利活用を一体的に進める新しい研究基盤「NAIST-ARWIT（アーウィット）システム*」をつくりあげ、それを軸に展開する取り組みです。現在、ARWIT推進センターのメンバーを中心にこのシステムの構築が精力的に進められています。

システムの導入によって、設備・データ・AIを有機的につなぎ、研究開発を加速させるとともに、本学で生まれた成果を産業や社会へ迅速に展開し、新たなイノベーションの創出を目指します。

*ARWIT：デジタル技術やロボティクス技術を活用した研究開発の自動化を表すAutomated Research Workflowと、社会実装を表すIndustrial Translationの頭文字を合わせたもの。



研究・イノベーション推進機構
副機構長

MESSAGE

2025年10月に新設の研究・イノベーション推進機構で、社会実装に向けた産官学連携に取り組んでおりますが、難しいのは「産」と「学」の考える「社会実装」の意味がそれぞれ異なるところです。研究者は社会の進歩する道筋が一つでも見つかれば実装できる（できた）と考えがちですが、実社会でビジネスになるかの見極めはもっとシビアで、結果として産業界からの実装への投資が見送られることもあります。機構では、新しいビジネスを成功へと導く連携を目指し、多くの関係者と知恵を絞り、一丸となってイノベーション創出へ向けて一つ一つ取り組んでいきます。

菊地 則義

研究・イノベーション推進機構特任教授。実は下道派。
現在の愛車は4年間で約8万km走行。



ARWIT推進センター
セキュアデータ流通部門長

MESSAGE

大学や企業が持つ研究データには、外部に公開できない貴重な情報が数多く含まれています。こうしたデータを安全に活用し、研究やイノベーションにつながる「財産」とするため、データの中身を見せることなく検索や分析ができる技術を開発しています。2025年度は、データを秘匿したまま計算できる「秘密計算」などの技術を用いて、検索・活用のための基盤システムを構築しました。今後は、ARWITの研究自動化設備や電子ラボノートとの連携、対象分野の拡大を進め、大学や企業が安心してデータを共有・活用できる研究環境の実現を目指します。

林 優一

キャンパスDX担当学長補佐、
先端科学技術研究科情報科学領域教授。
実は荷物をグラム単位で減らす派。



NAIST-ARWITシステムの概念図。本学の3領域の強みを結集したシステムを構築することで、研究成果を社会実装へと展開していく姿を描いている。

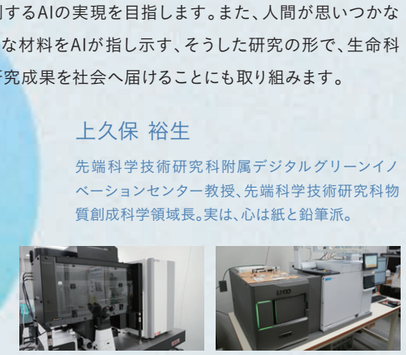
ARWIT推進センター
ファウンドリ部門長

MESSAGE

新しい材料を生み出す研究は、「作る」「調べる」「考える」の繰り返しです。この繰り返しを人の手から機械に委ねるために、実験の自動化・自律化を実現する研究設備の開発を進めており、2026年度中に学内へ設置する予定です。今後は、これらの設備から得られる膨大な実験データを蓄積・活用し、材料の作り方と性質の関係を予測するAIの実現を目指します。また、人間が思いつかなかった有望な材料をAIが指し示す、そうした研究の形で、生命科学分野の研究成果を社会へ届けることにも取り組みます。

上久保 裕生

先端科学技術研究科附属デジタルグリーンイノベーションセンター教授、先端科学技術研究科物質創成科学領域長。実は、心は紙と鉛筆派。



研究を加速させる設備整備、進行中！
現在、研究の自動化・高度化を支える設備の導入が続々と進んでいる。

ARWIT推進センター
戦略企画部門長



MESSAGE

奈良先端大のJ-PEAKS事業では、情報科学・バイオサイエンス・物質創成科学の3分野を融合した新しい研究システム「ARWIT」をつくり、研究や社会貢献のあり方を大きく変えようとしています。異なる分野同士の橋渡しや、研究者の意欲を引き出すインセンティブの設計、外部との連携促進など、取り組むべき課題は多岐にわたります。異分野融合研究を推進した経験などを活かしながら、J-PEAKS担当学長補佐、またARWIT推進センターの戦略企画部門長として、本事業全体の推進に取り組んでいます。

中島 敬二

J-PEAKS担当学長補佐、
先端科学技術研究科バイオサイエンス領域教授。
実は野球は虎派。

ARWIT推進センター
データ利活用部門長



MESSAGE

研究の現場では、日々実験データが生み出されています。しかし、多くのデータは再利用しやすい形式になっていなかったり、各個人や研究室ごとに管理されており、チームや大学全体の資産として十分に活用されていません。そこで、こうした研究データを蓄積・共有し、未来の研究へ生かす基盤として、電子ラボノートの全学展開を進めています。今後は、研究設備やAIとも連携し、過去の研究成果を新たな研究へとつなぐことで、より効率的で質の高い研究環境の実現を目指します。

藤井 幹也

データ駆動型サイエンス創造センター教授、
先端科学技術研究科物質創成科学領域教授。
実は、学生時代の夢はプロダンサーか研究者。

Pick Up!

電子ラボノート

研究の現場で、日々生み出される膨大なデータ。その記録を電子的に蓄積・管理し、共有するのが「電子ラボノート」です。近年では、研究データを資産として蓄積し、次の研究へとつなげる基盤としても期待されています。今回は、本学でその導入と運用を推進してこられた高須賀先生と李先生をお迎えし、電子ラボノートの基本的な役割から導入時の課題や工夫、そして研究データ活用のこれからのお話を伺いました。

アニュアルレポート制作WG：以下ア　電子ラボノートは、近年ますます重要になる研究データの活用や在り方を、どのように変えていくものだとお考えでしょうか。

高須賀先生　これまでデータは、主に論文で自分の主張や考えを裏付けるものとして扱われてきたと思います。しかし、AIや機械学習の発展によって、データそのものを資産として活用できるようになってきました。電子ラボノートは、データを単なる裏付けにとどめず、次の研究を動かす「燃料」として実際に活用するためのツールです。今後も電子ラボノートを通じて、データの意味合いや使い方そのものが変わっていくと思っています。

ア　実際に電子ラボノートを活用するうえでは、研究データをどのように扱い、管理していくことが重要でしょうか。

李先生　私が主に注目しているのは、データの中身そのものというより、データの形式や権限をどう管理するかという部分です。どこに保存するのか、誰が閲覧できるのか、誰が修正できるのか。そうした権限や保存先も含めて管理することが重要です。

利用する人にとって使いやすいことと、管理する側が安全かつ安定的に運用できること。その両方を成立させる必要があります。

ア　お二人は異なるバックグラウンドをお持ちですが、電子ラボノートに関わることになったきっかけは、どのようなものですか。

高須賀先生　僕はもともと材料系の研究をしていて、プログラムとはほとんど縁のないところから始まったんですよね。そこから少しずつ、データベースやプログラムを使う側に近づいていきました。

以前材料メーカーに勤めていたときから、「もっと電子化されていたらいいのに」と感じることがありました。記録時からデジタルデータになっていれば、紙に記録したものを後からデジタルデータにしてAIや機械学習に使うよりも、その後の活用につなげやすい。そんな思いを持っていたときに本学での電子ラボノートの取り組みを知り、「これはやるしかない」と思いましたね。

李先生　私は以前から、紙媒体で管理していた情報を電子化し、データベースとして整備したり、その構築や管理に関わったりしてきました。

電子ラボノートに関わり始めた頃も、様々な議論がありました。「使い慣れた紙のノートのほうが使いやすい」という人もいれば、「AIと連携しやすい電子データのほうがいい」という人もいます。単にシステムを構築するだけではなく、なぜこの仕組みを使うのかを説明し、利用する人の理解を得ていくことも大切だと感じました。

高須賀先生　李先生が参加してくださって、運用やセキュリティの面もより体系的に整備が進みました。研究者が使いたい仕組みと、それを安心して使い続けられる仕組みの両方を考えられるようになったのは大きかったと思います。

ア　研究者の視点と運用・管理の視点の両方から取り組まれてきたのですね。導入を進める中で、特に大変だったことはありますか。

李先生　特に多かったのは、「電子化したデータは、ほかの人からも見えるようになるのではないか」という不安の声でした。研究データには、適切な範囲で閲覧や編集を制御することが必要です。そのため、利用者や研究室に応じた権限管理を行い、安心して使える仕組みであることを丁寧に説明していきました。

ア　研究室ごとに求められるものも異なるのでしょうか。

李先生　はい。「化学式を扱いやすくしたい」「大容量のデータを扱いたい」など、ニーズは様々です。ただ、すべてを個別に対応すると管理が複雑になります。共通のルールを設けながら、研究者のニーズと安全で一貫した運用をどう両立するかは難しいところでしたね。

利用者やデータ量が今後どの程度増えていくかも、最初から完全に予測できるものではありません。将来の拡大を考えながら準備し、継続的にシステムの状態を見ていくことも重要だと思っています。

高須賀先生　そういった要件を満たせる製品を選ぶのにも苦労しましたね（笑）。それと、新しいものを導入することへの心理的なハードルを下げることも大きな課題でした。

新しい仕組みを「便利そう」と思う人がいる一方で、「なぜ新しいことを覚えなければならないのか」と感じる人もいます。どれだけ良い仕組みでも、使われなければ意味がありません。

ア　そう感じる人に使いたいと思ってもらうのは難しそうですが、どのような工夫がありましたか。

高須賀先生　最初から全員に広げるのではなく、スモールスタートで始めました。「こんなふうに使える」という実例が見えてくると、少しずつ「どうやったら使えるの？」と相談してもらえるようになりましたね。

ア　運用を始めてから、利用者からどのような反応がありましたか。

李先生　一度、システム障害によって一時的にデータが画面上に表示されなくなった際、「データは大丈夫でしょうか」という問い合わせが寄せられたことがありました。データ自体はバックアップによって保全されていましたが、利用者からはその状態が見えません。そこで、障害時にもデータの保全状況を確認しやすくする仕組みの重要性を認識しました。

この経験から、実際にデータを守ることはもちろん、守られていることを利用者が確認できることも、安心して使ってもらうためには大切だと学びました。運用を続ける中で、利用者の声を受けながら仕組みを改善していくことが重要ですね。

ア　電子ラボノートを導入する以前と比べて、一人の研究者としてどのようなメリットを感じていますか。

高須賀先生　一番大きいのは、人とのやり取りが楽になったことですね。「この実験は何だったっけ」となったとき、以前であれば紙のノートや表計算ソフトなどを一つひとつ開いて探していました。電子ラボノートなら、ノートに書いた内容まで含めて検索できます。さらに、そのノートを共有すれば、実験に関する情報を相手にも見てもらえます。何度も説明を重ねなくても、同じ情報を見ながら会話できる。この実験をした人は誰だったっけ？と人を探す手間も減ります。利用者から「あれがないと研究できない」と言ってもらえたときは、すごくうれしかったですね。

李先生　以前であれば、実験データを共有するために対面で打ち合わせをする場面も多かったと思います。電子ラボノートで同じデータや記録を参照できれば、場所にとらわれずに情報を共有できます。研究の進め方そのものも、少しずつ変わっていくのではないかと思いますね。

高須賀先生　そうですね、あとは技術専門職員の方々にも利用が広がっています。研究者が実験データの解析などを依頼するときも、電子ラボノート上のコメント機能などを使ってやり取りできるようになり、メールのやり取りよりも格段に情報の共有がしやすくなりました。

ア　そうなんですね。最近開催されたフォーラムは盛況だったと伺いましたが、どのような反響がありましたか。

高須賀先生　産学のどちらからも関心を寄せていただいています。参加者も増え、「データをどう蓄積すればよいのか」「電子ラボノートをどう導入すればよいのか」といった質問が多く寄せられました。

一度導入したものの、十分に定着させられなかった経験を持つ組織から相談を受けることもあります。

そうした話を聞くと、導入すること自体ではなく、どう使い続け、研究に生かしていくかまで考えることが大切なのだと思います。

李先生　今後は、導入方法だけではなく、その先の「どう活用するか」という部分にも、さらに焦点を当てていきたいですね。電子ラボノートを導入することがゴールではありません。蓄積したデータをどう研究に生かし、次の研究へつなげていくのか。そうした活用の段階についても、学内外の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

ア　最後に、電子ラボノートは先生方にとってどのような存在ですか。

高須賀先生　ここまで試行錯誤してきた中で、僕は電子ラボノートを「インフラ」のようなものだと考えるようになりました。

水道や電気は、普段は意識しなくても、止まってしまうと生活が成り立たなくなりますよね。電子ラボノートも、これから研究活動の中でそうした存在になっていくのではないかと思っています。だからこそ、その研究のライフラインを止めないためにどうするかを、今後も考え続ける必要があります。

李先生　私は電子ラボノートを「窓口」だと考えています。研究者が作ったノートを、これまでとは違う新しい世界へつなげる窓口です。

その窓口の先には、データ解析やAI、さらにその先の研究へとつながる新しい流れがあります。電子ラボノートは、その入口になるものだと思います。

高須賀先生　「電子ラボノート」と聞いたときにNAISTを思い浮かべてもらえるように、そういった未来を描けるように頑張りたいですね。



NAIST
電子ラボノートフォーラムの様子



電子ラボノートを
使用している様子





高須賀 聖五

先端科学技術研究科物質創成科学領域
マテリアルズ・インフォマティクス研究室/
ARWIT推進センター データ利活用部門助教
実は曜日ごとに靴下の色を変える派。

李 帝明

データ駆動型サイエンス創造センター/
ARWIT推進センター データ利活用部門特任助教
実は、とんかつ派。

挑戦は続いていく

01 EPOCH採択
研究の可能性を広げる環境づくりへ

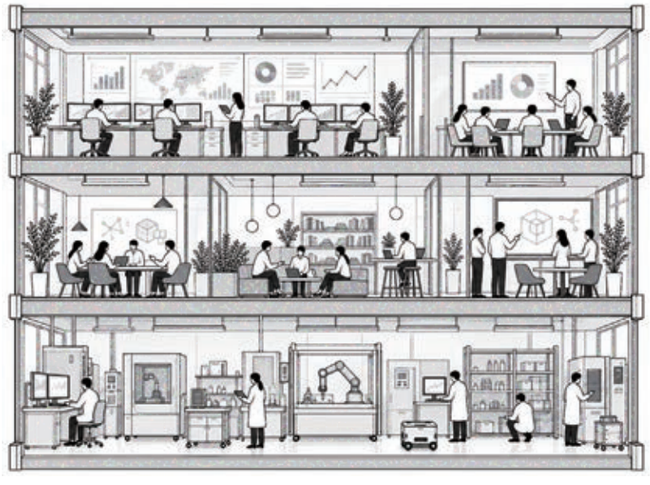
私たちの暮らしを支える医療やAI、環境技術。その多くは大学の研究から生まれています。しかし、優れた研究にはアイデアだけでなく、最先端の研究設備、それを支える専門人材、そして研究データを活用する仕組みなど、「研究基盤」の充実が欠かせません。

近年、研究の高度化・複雑化に伴い、研究基盤そのものが大学の研究力を左右する重要な要素となっています。奈良先端大では、研究設備や専門人材を大学全体で活用するとともに、電子ラボノート（ELN）の全学展開を進め、研究データを効率的に蓄積・活用できる環境を整備しています。

こうした取り組みが評価され、本学はJST「先端研究基盤刷新事業（EPOCH）」に採択されました。EPOCHでは、最先端研究設備の高度利用や専門人材の育成に加え、電子ラボノートの活用をさらに発展させ、研究設備から得られるデータや実験データを有機的に連携させることで、データを中心に据えた研究基盤（Data-Centric研究基盤）への転換を推進します。

さらに、設備・データ・人材が一体となって機能する研究環境を構築し、研究者が研究に専念できる環境を実現するとともに、学内外や企業との共同研究を一層促進します。奈良先端大は、この新たな研究基盤を強みに、国内外から優れた研究者が集い、分野や組織を越えた共創から次々とイノベーションが生まれる大学を目指します。

新棟（建設予定）のフロア構成イメージ



データを活用・管理するフロア

3F 集めたデータを分析・活用し、研究設備やデータを一体的に管理する。

他機関と共創するフロア

2F 企業をはじめとする他機関と連携し、研究成果を新たな技術や価値につなげる。

データを生み出すフロア

1F 研究機器やロボットを活用し、様々な実験・計測データを生み出す。

NAIS Topics



J-PEAKSでARWITを立ち上げたとき、関係するメンバーを一箇所に集められれば、どれだけ進めやすかっただろうと思いました。しかし本学には、その場所がありませんでした。それがずっと心残りでした。

EPOCHの施設整備で建つ新棟は、この心残りに応えるための建物です。

技術職員が集い、研究者と同じ場所で顔を合わせ、設備とデータを介して互いの仕事に触れる。

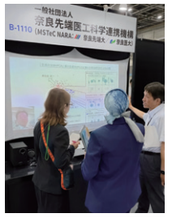
それが次の10年で本学が変わる条件だと考えています。

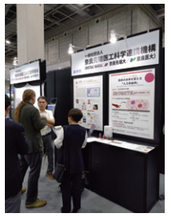
02 MSTeC NARA
医学・工学の融合を推進

一般社団法人奈良先端医工科学連携機構（略称：MSTeC NARA[エムステックなら]）は、本学と公立大学法人奈良県立医科大学（奈良県橿原市）が協力して設立した法人です。両大学の強みを生かし、医学・工学および関連諸科学分野での教育・研究における連携を進めることで、教育研究水準の向上や大学の機能強化とともに、地域発展への寄与を目指しています。本機構は、文部科学大臣から「大学等連携推進法人」の認定を受けています。

※大学等連携推進法人：大学間の教育・研究等の連携を進めるために設立された一般社団法人のうち、文部科学大臣から一定の基準を満たしていると認定された法人。

ヘルスケア分野の国際展示会「WHX Osaka 2026」へ出展





2026年7月2日から4日まで、インテックス大阪で開催された国際展示会「WHX Osaka（World Health Expo Osaka）2026」にMSTeC NARAとして出展し、本学と奈良県立医科大学の最新の研究成果や技術を紹介しました。会場では、アルツハイマー病の治療を目指す光刺激デバイスや、救命医療への活用が期待される人工赤血球の実物を展示したほか、新規医療用素材や感染症対策技術などを動画やポスターで紹介しました。国内外の企業や研究機関との情報交換も行い、両大学の密接な連携体制を広く発信しました。また、新たな連携の創出につながる貴重な機会となりました。

「医工連携が未来を創る ～MSTeC NARAの挑戦～ フォーラム」を開催

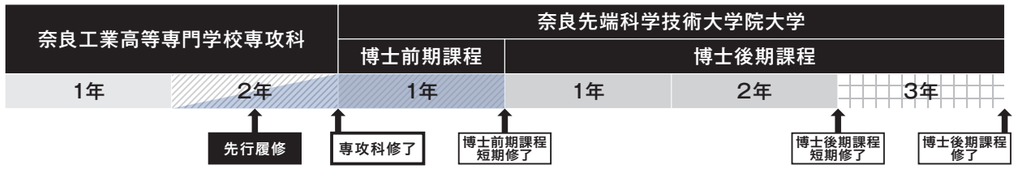
2025年12月15日、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構等との共催により、大阪でフォーラムを開催しました。

当日は、MSTeC NARAの代表理事、副代表理事を務める両大学の学長らによる挨拶に続き、工学技術の医療応用やMBT（Medicine-Based Town：医学を基礎とするまちづくり）など、両大学が進める研究や取り組みを紹介しました。パネルディスカッションでは、産官学の有識者も交え、医工連携の可能性や、研究成果を社会でどのように生かしていくかについて意見を交わしました。



03 奈良高専－大学院連携教育プログラム
高専在学中から、大学院教育を先取り

「奈良工業高等専門学校専攻科との高専-大学院連携教育プログラム」は、包括協定を締結している奈良工業高等専門学校と本学を一貫してつなぐ教育システムとして2025年度より開始しました。本プログラムでは、高専専攻科に在学している時期から本学の特別学修生および科目等履修生として受け入れ、高度な専門教育や研究指導を体系的に提供することで、本学の博士前期課程進学後に1年での短期修了を目指します。2025年度の第1期生3名に続き、2026年度は第2期生4名を新たに迎え、研究指導計画に沿って一貫教育を本格始動しました。今後も両機関の強みを生かした密な連携のもと、教員同士の交流もさらに深めながら、高度な研究力と実践力を備えた優秀な人材の早期育成および社会への輩出に努めてまいります。



hot topics of hito / koto

話題のヒト／コト

まだまだあります

01

「奈良先端大発スタートアップ」新たに4社認定

本制度は本学の研究成果等を活用して起業した企業を認定し、奈良先端大発スタートアップの称号を使用することを認めるとともに、様々な支援を行うものです。2025年度はNODAS株式会社、株式会社EASE創研、株式会社LEP、株式会社ROBOZOOの4社が新たに認定されました。

NAIST STARTUP

博士人材と企業をつなぐ一日

02 2025/7/26

京都・奈良7大学の合同説明会を開催

西日本最大級の博士キャリア合同説明会が、京都市勧業館みやこめっせで開催されました。本学を含む京都・奈良の7大学が連携して実施し、143名の大学院生と博士人材の採用に関心を持つ企業21社が参加しました。全体プレゼンテーションや個別ブース、交流会を通じて、院生が自身の専門性を生かしたキャリアを考える機会となりました。



博士キャリア合同説明会 in Kyoto-Ph.D. Career Fair in Kyoto-



OIST × NAIST Café - Step into Graduate Schools -

京都｜2025/9/6
東京｜2025/11/22　大阪｜2025/11/24

ドリンク片手に楽しみながら

03

OISTとNAISTが合同大学院説明会を開催

沖縄科学技術大学院大学（OIST）と本学は、2025年度に京都、東京、大阪にて合同大学院説明会「OIST × NAIST Café」を開催しました。参加者は、両大学の教育プログラムや研究環境に加え、在学生らによる体験談に気軽に耳を傾けることができ、いずれの日程も盛況のうちに終了しました。

04 2025/10/31

集い、対話し、学ぶ

学生同士の研究交流とキャリア講演が生み出す新たな視界

なら100年会館で開催されたワークショップでは、優秀で志ある博士人材を支援する「NAIST Granite/NAIST Granite-AI」の支援を受ける学生が、自身の研究のショートプレゼンテーションやポスターセッションを行ったほか、社会で活躍する本学OBと博士のキャリアパスの専門家による講演も実施されました。参加した学生たちは、異分野の研究に触れながら質問や議論を交わし、新たな視点や発想を得ました。また、様々な企業で活躍するOB等の話を通じて、将来の多様なキャリアパスについて考えを深めました。



博士人材支援プロジェクト「NAIST Granite / NAIST Granite-AI」学際的人材育成ワークショップ2025

次代を担う研究者たちへ

05 2026/1/6

優れた研究・教育活動を称え、助教2名を表彰

本賞は、教員評価において特に顕著な評価を受けた助教を称える賞として、2023年度より新設されました。第3回目の表彰となる今回は、情報科学領域の坂井 優介助教、バイオサイエンス領域の甲賀 栄貴助教の2名が授与されました。



NAISTプレジデンツフェロー2025

06 2026/2/20

大和大学と包括協定を締結

本学と大和大学（大阪府吹田市）は、「連携・協力に関する包括的な協定」を締結しました。これまでの研究室インターンシップや推薦入学等の実績を基盤に、教育・研究全般での連携を深め、社会に貢献する高度な人材の育成を推進します。



協定締結式

未来の研究者たちが集結！

07 2026/3/26・27

高校生・高専生が探究活動の成果を発表

高校生・高専本科生が、多彩な講義・演習・サイトビジット等を通じて科学技術と探究・研究を学ぶ教育プログラム『NAIST STELLA プログラム2025：「共創」が育む主体性の未来』のラップアップ合宿が開催されました。合宿では参加者が研究成果を発表したほか、特別講義や学長との座談会、修了証書授与、各賞の講評・表彰が行われました。



『NAIST STELLA』ラップアップ合宿にて

NAIST 探訪

たずねるから、もっと近くなる。



1 | Campus Walk

2 | 研究者たちの横顔

3 | 私たちが好きな理由

NAIST 日々アップデート中…



クリアファイル：学内公募で素敵なデザインがたくさん集まりました！選ばれたデザインで広報用グッズも作成しています。



ホームページ： NAISTのことをもっと知っていただけるように、デザインや構成をリニューアル。多言語にも対応しました。









ナイスポ！：NAISTの魅力を楽しく学べる「ナイスポ！ NAIST EXPO」。最先端の研究に触れる企画に加え、2023年度からフリーマーケットやキッチンカーなど、地域とつながる様々な企画も実施しており、2025年度も、多くの方にご来場いただきました。





大学ホームページのリニューアルやアパレルデザインコンペ、
「ナイスポ！ NAIST EXPO」など、
NAISTでは大学の魅力を
もっと身近に伝えるための取り組みを進めています。

YouTube
https://www.youtube.com/user/NAISTChannel

X
https://x.com/NAIST_MAIN

Instagram
https://www.instagram.com/naist_pr/

Campus Walk


b-1

a 正門・山中ロード

a-1 まずはNAISTの顔、奈良先端大の正門がお目見え。3つの三角形が連なったユニークな形は、大和三山（天香久山（あまのかぐやま）、畝傍山（うねびやま）、耳成山（みみなしやま））を表しており、情報・バイオ・物質の三領域を象徴しています。／a-2 入り口から右手に行くと、山中伸弥栄誉教授が、本学に在籍していた頃、毎朝ランニングされていた道「山中伸弥栄誉教授記念ランニングロード」（通称「山中ロード」）のスタート地点が見えます。


a-1


a-2

b バイオサイエンス棟
バイオサイエンス領域
生命科学研究基盤センター

b-1 正門から入ってすぐ右手側に見える緑のラインの建物。先端科学技術研究科バイオサイエンス領域の研究棟であるほか、生命科学研究基盤センターも設置されています。／b-2 外には植物実験施設と動物実験施設も。（写真は植物実験施設です。）／b-3 バイオサイエンス棟のほか、各領域棟や図書館に設置されている個室ブース。気軽にひとりだけの空間になることができ、学生のweb面談などに活用されています。／b-4 学生が休憩等に使用できるスペースを設けています。このスペースはバイオサイエンス棟のほか、物質創成科学棟にも設置されています。／b-5 登録者数124万人（2025年10月21日時点）を誇る教育系YouTubeチャンネル『予備校のノリで学ぶ「大学の数学・物理」』を運営するヨビノリたくみ氏の動画で、バイオサイエンス領域の6つの研究室をご紹介いただきました。


b-2


b-3


b-4


b-5




c-4


c-1


c-5



c-2


c-6


c-3

c 物質創成科学領域
マテリアル研究プラットフォームセンター
附属メディクルクス研究センター

c-1 バイオサイエンス棟の正面玄関を出て、まっすぐ進むと右手に現れる青のラインの建物。先端科学技術研究科物質創成科学領域の研究棟であるほか、マテリアル研究プラットフォームセンター、研究科附属メディクルクス研究センターも設置されています。／c-2 本学では、新たな財源を確保し、自己収入の拡大促進を図ることにより、教育研究環境の向上を目指すため、ネーミングライツ（命名権）制度を設け、ネーミングライツ・パートナーを募集しております。本棟の大講義室は、2025年10月1日に住友電気工業株式会社との協定を締結し、「住友電工 物質創成科学大講義室」の愛称で運用されることとなりました。／c-3 大講義室の内部。／c-4 棟内には卓球スペースも。実はバイオサイエンス棟にもあり、学内者の誰もが楽しむことができます。／c-5 コワーキングスペース。各領域に設けられており、ちょっとしたミーティングにもぴったり。／c-6 14ページの「NAISTopics」でも取り上げたEPOCHの新棟建設予定地。広い原っぱのようなこの風景は見納めです。



本学は学部を持たない独立大学院として1991年に設立された、最も新しい国立大学です。ここでは、科学技術の進歩と社会の発展に寄与することを目的とし、多様なバックグラウンドを持った教職員や学生が集い、「最先端」の研究が推進されています。また、キャンパスは豊かな自然にも囲まれており、最先端の研究設備が整った施設と豊かな自然環境が調和した景観も、本学ならではの魅力の一つです。

国道163号を進むと、木々の中から印象的な建物が姿を現します。

「あの建物は何だろう？」

初めて本学を目にした人は、そんなふうに感じるかもしれません。

私たちアニュアルレポート制作WGも本誌の制作を通してあらためてキャンパスを探訪し、普段は気づかなかった風景や場所に出会うことができました。

本記事では、キャンパスをめぐりながら、私たちが見つけた本学の様々な一面をご紹介します。


g-1

グリーンラボ

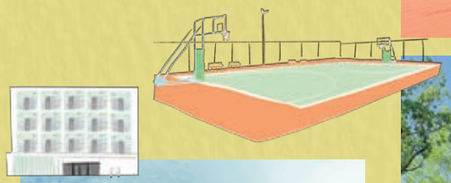
g-1 構内の最奥に位置するグリーンラボは、研究圃場として実験植物を育成するだけでなく、教職員・学生が植物に親しみ、自然を身近に感じられる場として活用されています。

学生宿舎・職員宿舎

f-1 情報科学棟の裏手を進むと学生宿舎と職員宿舎があります。本学では709戸の学生宿舎を用意しており、学生の生活を支えています。


f-1


h-1




h-3


h-2

メタセコイア並木周辺

h-1 メタセコイア並木の周辺には、予約をすれば学内者の誰でも自由に利用できる、バレーボール・バスケットボールコート、テニスコート、グラウンドがあり、多くの教職員・学生がリフレッシュする姿が見られます。／h-2 情報科学棟横のメタセコイア並木道。季節ごとに色を変え、私たちの目を楽しませてくれています。／h-3 バスケットコートの横に位置するゲストハウスせんたん。本学を来訪する研究者をはじめ教職員・学生も利用できる福利厚生施設です。宿泊施設の他に交流室が設けられています。／h-4 咲いてく保育園。2024年10月1日にゲストハウスせんたん内1階に開所。時折キャンパス内をお散歩中の園児達に出会うことも。（保育園のためのご寄附もお願いしております。詳細は40ページの「NAISTを応援するカタチ」をご覧ください。）

ネーミングライツ・パートナー募集中！

https://www.naist.jp/about/namingrights/index.html


i-1


i-2



h-4



ミレニアムホール

i-1,i-2 食堂と事務局の間に位置する本学で最も広いホール。表紙写真の建物はこちらです。入学式や学位記授与式をはじめ様々な講演やイベントを行っています。ミレニアムホールでは、現在ネーミングライツ・パートナーを募集しております。


d-1

学際融合領域研究棟Ⅰ号館
データ駆動型サイエンス創造センター
附属デジタルグリーンイノベーションセンター
ダイバーシティ＆インクルージョン推進室

d-1 物質創成科学棟をさらに進むと見えてくる建物。学際融合領域研究棟Ⅰ号館として、データ駆動型サイエンス創造センター、研究科附属デジタルグリーンイノベーションセンター、ダイバーシティ＆インクルージョン推進室が設置されています。／d-2 実は裏から見るとかっこいい！夜の国道163号からは、ライトアップされた「NAIST」の文字を見ることができます。／d-3 教職員・学生や外部の企業、専門家など様々な人たちが、分野の垣根を超えて自由なコラボレーションを生み出すための場所として設けられた「CDGコモンズ」。


d-2



d-3

情報科学棟
情報科学領域
総合情報基盤センター

e-1 物質創成科学棟の入り口を出て、まっすぐ歩いていくと右手に見える赤いラインの建物。先端科学技術研究科情報科学領域の研究棟であり、総合情報基盤センターも設置されています。／e-2 災害時にも重要な情報サービスを継続できるよう、コンテナ型サーバ収容設備を整備し、地震や停電への備えを強化しています。／e-3 2025年3月1日にパナソニック インフォメーションシステムズ株式会社とネーミングライツに関する協定を締結し、「パナソニックＩＳ大講義室」の愛称となった大講義室。2026年4月1日をもって、パナソニック インフォメーションシステムズ株式会社は「パナソニック デジタル株式会社」に、パナソニックＩＳ大講義室は「パナソニック デジタル大講義室」に変更になりました。／e-4 大講義室の外側。／e-5,e-6 女性休憩室。各領域棟と事務局別館に設けられ、教職員・学生が月経期、更年期等の女性の体調不良や搾乳・授乳等の理由で使用することができます。


e-1


e-2



e-3


e-4


e-5


e-6

事務局・附属図書館（電子図書館）・学際融合領域研究棟２号館

l-1 池から正門に向かって歩いていくと右手に見える建物。同じ建物の中に事務局、附属図書館、学際融合領域研究棟2号館が設置されています。／**l-2** 建物の外に設置されたシェアサイクルサービス「HELLO CYCLING」。学生宿舎にもステーションがあり、学内3か所で利用できます。専用アプリでいつでも自転車の予約・利用・返却ができ、教職員・学生が学内外の移動手段として活用しています。／**l-3,l-4** 高砂香料工業株式会社と2025年4月1日にネーミングライツに関する協定を締結し、「TAKASAGO研修ホール」が誕生しました。「TAKASAGO研修ホール」は学際融合領域研究棟2号館にあるホールで、学内の各種行事、記者発表等に利用されています。／**l-5** 学際融合領域研究棟２号館の２階・３階にあるリフレッシュコーナー。憩いの場としてランチの時間は大人気。／**l-6** 附属図書館。24時間の利用が可能です。／**l-7** マルチメディアラウンジ。雑誌、新聞、大画面テレビのある24時間利用可能なスペース。学生が談笑している姿も。／**l-8** シアターラウンジ。大画面テレビやプロジェクター、ホワイトボードなど、いろいろな設備が揃った交流スペース。／**l-9** **a-2**でご紹介した「山中ロード」のゴール地点。走り切った時に見える景色です。


l-1

／大好評稼働中！＼


l-2


l-4



l-3


l-5


l-6


l-7


l-8


l-9

事務局別館

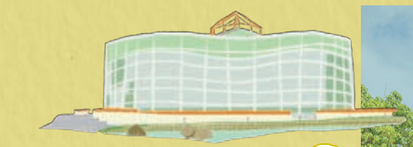
m-1 正門から出て右に曲がり、坂を上ると左手に見えてくる円形の建物。事務局別館では現在、会計課と施設課と監査室の職員が働いています。実は33ページの写真は、別館の3階から見上げた景色です。／**m-2** 大学構内から別館側へ抜ける小道。この道を通って別館と行き来する人の姿が多く見られます。


m-1


m-2

◀ 次のページからは研究室紹介！


j-3





j-2



j-1

大学会館（食堂等）・保健管理センター

j-1,j-2 ゲストハウスせんたんからメタセコイア並木の道を池の方に戻ると大学会館に。大学会館の中にある食堂は、ランチタイムには多くの利用者で賑わいます。2025年10月1日には、株式会社堀場製作所と、ネーミングライツに関する協定を締結し、食堂に併設された屋外テラス「HORIBA Joy&Funテラス」が誕生しました。また、リニューアル工事が完了したタイミングでのネーミングライツ・パートナーの決定となり、「HORIBA Joy&Funテラス」の名称が記された広々としたベンチが誕生しました。／**j-3** 食堂の隣のコンビニエンスストアに冷凍庫を設置し、ハラル対応の冷凍食品を販売しています。食肉、レトルト食品等10種類以上を取り揃えており、留学生から好評です。／**j-4** 大学会館の2階にある保健管理センター。健康診断やメンタル面での相談など、幅広く教職員・学生の健康を支えています。また、生活や業務で感じた困りごとをはじめ、何でも気軽に相談できる窓口として、2026年4月にサポートコーディネート部門が新たに設置されました。／**j-5** 株式会社アカリクが運営するアカリクラウンジが、高山サイエンスプラザから本学保健管理センターの向かいに場所を変えリニューアルオープン。キャリアアドバイザーが常駐し、民間企業への就活だけでなく、学生が自身のキャリアを考える場として運営されています。



j-4



j-5

池周辺

k-1 大学中心部に位置する憩いの場。実は、池には鯉が泳いでいます。お天気の日は探してみるのもいいかも。／**k-2** 池の畔。春にはお花見や、BBQを行う研究室の姿も。気候の良い時はコンビニエンスストアや食堂でお弁当を買ってピクニックを楽しむ姿も見られます。


k-2


k-1

一歩引いて本質をみる

遠回りに見えた道も、振り返れば今につながっている。変化の中で新しい可能性を見つけながら、自分らしい研究を築いてきた松原 崇充教授。本誌では、柔軟な視点を大切にする研究者の歩みをたどる。

01 研究について お聞かせください。

人がロボットの動きを一つひとつ考えてプログラムしなくても、ロボットが自身の経験や、人がお手本として見せる動きから、目的に合った行動を自ら学ぶ「ロボット知能」を研究しています。工場や建設現場、生活環境、研究室などの様々な状況を理解し、人にとって負担の大きい作業、難しい作業、危険な作業を自動化できる知能の実現を目指しています。

02 今後、この研究で目指している理想の姿を教えてください。

目指しているのは、現場ごとに人が細かく調整しなくても、ロボット自身が経験から学び、その環境に合わせて成長していけるAIです。研究室で生まれた技術を見た企業の方から「こんなことに使えないか」と声をかけていただくことも多く、現場で試す中で見つかった課題を持ち帰り、さらに技術を発展させています。研究と社会実装を行き来しながら、新しい発見や次の研究につながっていくことも、この研究の大きな魅力だと感じています。

03 今の研究のどのようなところにやりがいを感じていますか？

研究を進める中で、新しい発見に出会えることが一番のやりがいです。自分が思っていたものとは違う結果が出たとしても、そこから新しい考え方や研究テーマが見つかることがあります。また、一緒に研究する学生やスタッフが成長していく姿を見ることにも、大きな喜びを感じます。研究成果が思いもよらない形で社会に役立つ瞬間に立ち会えるのも醍醐味です。

04 今の研究を志されたきっかけは何でしょうか？

実は、最初からロボットAIを目指していたわけではありません。進学するたびに「こちらの方が面白そうだ」と感じた分野へ、少しずつ方向転換していく中で出会ったのがロボットAIでした。当時は今ほど注目されている分野ではありませんでしたが、新しく自由な雰囲気に魅力を感じ、この道へ進むことになりました。

05 研究室の推しポイントを教えてください。

研究室には、機械、電気、情報、数学など、様々なバックグラウンドを持つ学生や研究者が集まっています。また、海外からの留学生やインターン生も多く、多様な考え方に触れながら研究できる環境です。今持っているものに何かを足したい人が集まる研究室でもあり、それぞれの専門性を生かしながら、基礎研究から社会実装まで幅広い研究に取り組めるところが魅力です。



松原 崇充

1980年生まれ、山口県出身。2003年大阪府立大学（現：大阪公立大学）工学部を卒業後、本学情報科学研究科博士前期課程へ進学。2007年に博士後期課程を修了。2008年より本学教員およびATR（国際電気通信基礎技術研究所）脳情報研究所客員研究員となる。現在は本学の先端科学技術研究科情報科学領域教授、ATR脳情報研究所客員研究員、福島国際研究教育機構客員研究員を兼ねる。実は鳥派。インコを飼っている。

06 今の自分に影響を与えた出来事

若手研究者時代に1年間滞在したオランダでの経験が、研究人生の大きな転機だと語る。そこでは、目の前の課題をそのまま解決しようとするのではなく、「一歩引いて本質を見る」という考え方に触れた。ロボット、ゴミクレーン、化学プラント。一見すると全く異なる対象も、視点を変えれば共通する原理や課題が見えてくる。その経験は現在の研究スタイルの土台となっている。

07 定番お昼ご飯

「学食の親子丼」





08 行き詰まったときの気分転換は？

気分転換になるのは、子どもの趣味につきあうこと。子どもと奈良県周辺の低山へ出かけ、大和盆地を望んだり、水晶やガーネットなどを探しながら歩くと、目的なく散歩するより、「宝探し」になるのが楽しいのだそう。

「私物の鉱物」



09 座右の銘

リスクを取ることでキャリアが頑強になるかで

テニュア・トラック制へ挑戦した際、恩師からいただいて以来、松原先生自身も学生へ伝えている言葉。研究者は変化し続けてこそ前へ進める、という考えにつながっている。

※テニュア・トラック制：若手研究者が実績を積み、審査を経て任期のない上位職に登用される人材制度。

10 宝くじがあたったら？

カヤックとスズキのジムニーを購入。カヤックをジムニーに積んで吉野川へ出かけたいとのこと。学生時代にボート部で過ごした経験から、今でも吉野川などを下りながらゆっくり過ごしてみたいと憧れを語られた。



11 NAISTのアピールポイント

研究に集中できる環境はもちろん、教員や学生同士の距離が近く、分野を越えた交流が生まれやすいところがNAISTの魅力。新しい発想や共同研究につながる出会いも多いと感じています、とお話しいただいた。



高橋 慧

先端科学技術研究科情報科学領域
ロボットラーニング研究室博士後期課程3年。
実は旅行先で必ずゆるキャラのぬいぐるみを買います。



研究室情報

先端科学技術研究科 情報科学領域
ロボットラーニング研究室
情報科学棟A2II

研究室ホームページ
https://sites.google.com/view/naist-robot-learning-jp

研究室受賞紹介

高橋 慧さんが、2025年5月23日に、IEEE Robotics and Automation Society（RAS）Japan Joint Chapterの「Young Award」を、2026年3月13日に、計測自動制御学会の「学術奨励賞（研究奨励賞、技術奨励賞）」を受賞しました。受賞対象となった研究では、人の動作をロボットに教える模倣学習に着目し、人間の実演がロボットにとって再現可能かを判定し、その結果を実演者へフィードバックする手法を提案しました。

失われた脳神経機能 再生への挑戦

脳卒中が起きると、神経細胞が損傷し、運動や感覚に障害を引き起こす。一度損傷した神経の再生は非常に困難であるが、未だ治療法のない様々な神経疾患に対する新たな治療法を提示すべく、日々挑み続ける松田先生の研究室へお話を伺った。

脳神経機能再生学研究室
准教授
松田 泰斗

1986年生まれ、大阪府出身。2009年徳島大学工学部を卒業後、同大学院修士課程、本学バイオサイエンス研究科博士後期課程を経て、九州大学大学院医学系学府博士後期課程へ進学。
九州大学大学院医学研究院の特任助教、助教、講師等を経て、2024年11月より本学先端科学技術研究科バイオサイエンス領域准教授。実は甘党。

どんな研究をしていますか？

脳の神経機能を再生したい、というのが私たち研究室の目標で、それに関連する基礎的な研究と応用的な研究の両方を進めています。
例えば、脳卒中などにより神経細胞が失われた患者さんに対し、「細胞の運命変換技術」を用いて、脳内にある細胞をiPS細胞のような状態を経由せずに、直接、神経細胞に変えることで、新しい神経細胞を供給することができます。
神経細胞に限らず、誘導したい細胞によって導入する遺伝子が違うのですが、まず大事なのは、この導入する遺伝子を特定することです。
他の種類の細胞を誘導できるようになれば、いろいろな疾患の治療にもつながると思います。



研究のどのようなところにやりがいを感じますか？

インパクトはすごく大きいと思っています。絶対に世の中に必要になる技術だと思いますし、社会実装されるべき技術だと思っています。それを自分たちが推進できていることは、うれしいことだと思っています。

社会実装に関する展望を教えてください

神経細胞へ運命変換する技術自体は、もともと脳にある細胞を神経細胞に誘導して、脳梗塞後の神経機能を回復させるところまで、マウスの脳内ではできています。次の課題は、ヒトの細胞で治療につなげられるかどうかです。ヒトの細胞で治療効果が出せれば、より社会実装に近づくイメージがあります。疾患としては、今は脳梗塞を中心に研究していますが、アルツハイマー病や脊髄損傷など、いろいろな疾患にも応用できるのではないかと思っています。

行き詰まったときの気分転換に何をしますか？

誰かに話しかけています。研究室のみんなは気づいていないかもしれないけど、気分転換したくなると誰かのところに行って、「最近研究どう？」って話しかけています。
研究の話をしていない時間の方が長いので、自分の研究室で研究の話をしている時間は、僕にとっては楽しい時間です。
あとは家族と過ごしているときですね。そういうときは研究から離れます。



座右の銘は何ですか？

「なんとかなる」ですね。

何かをし続ける限り、いつかは解決できると思っています。

趣味は何ですか？

趣味はサッカーです。
小学2年生ぐらいからやっています。子どもが毎週土曜日と日曜日の午前中に練習しているので、それについて行って、一緒にやっています。



バイオサイエンス領域の西條教授とサッカーの試合後に。

NAISTの良いところを教えてください

空気がきれいだなと思います。空も澄み切っていて、どこまでも青くて気持ちが良いです。
研究についても、共通機器がきちんとそろっているので、研究できる環境が整っています。若い研究者が独立するには、すごく良い環境だと思います。
動物飼育の環境もかなり良いです。実験動物をきちんと使って研究できる大学は、実は限られているので、そういう点でも、しっかり実験ができる大学なので良いと思います。

研究室の推しポイントを教えてください

みんな個性的で、自由にやっているところです。
研究をしながら、スポーツやアルバイトをこなすアクティブな人もいれば、そういうことには興味がなく、研究ばかりしている人もいます。
みんな、やりたいようにやっていて、僕は好きです。

研究室情報

先端科学技術研究科 バイオサイエンス領域
脳神経機能再生学研究室
バイオサイエンス棟C410

研究室ホームページ
https://bsw3.naist.jp/matsuda/

プレスリリース情報

2025年5月22日
脳の幹細胞の老化メカニズム解明に成功
機能低下に関わる遺伝子を可逆的に制御する因子を特定
～細胞若返り誘導法の開発に期待～
https://www.naist.jp/pressrelease/250522.pdf

2026年1月21日
網膜形成を担う網膜前駆細胞の分化・再生機能を長く維持するための因子を特定
クロマチンの構造変化を制御する酵素が、遺伝子発現を安定化していた
～網膜再生研究への応用に～
https://www.naist.jp/pressrelease/260121.pdf

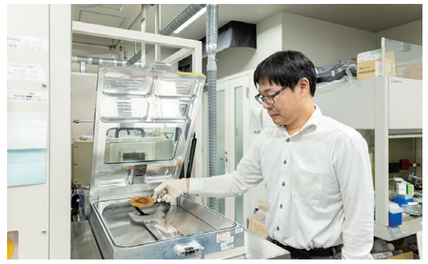
見えない世界を、半導体で見る。

体の中を走る神経のサインも、次世代通信を支える高周波の電界も、私たちの目には見えない。物質創成科学領域では、そんな目に見えない現象を半導体集積回路の力で「可視化」する光機能素子科学研究室の主宰教授である、笹川 清隆先生を訪ねてみました。



笹川 清隆

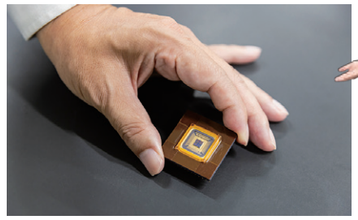
1975年生まれ、新潟県出身。1999年京都大学理学部を卒業後、本学へ進学。2001年に物質創成科学研究科博士前期課程、2004年に同研究科博士後期課程を修了。2004年～2008年まで情報通信研究機構の専攻研究員として勤め、2008年より本学教員となる。現在は先端科学技術研究科附属メディルクス研究センター教授兼物質創成科学領域教授。実はシャープペンシルは0.3mm派。



研究室には、独自の半導体チップを作成するための様々な装置がそなわっている。

Q1. どんな研究をされていますか？

A 私たちの研究室では、半導体集積回路を独自に設計し、目に見えない現象を可視化することを目指しています。その対象は生体内部や高周波電界など、多岐にわたります。これまでの技術ではとらえることが難しかった微小な変化を「見せる」ことで、新しい医療技術や次世代通信の発展への貢献が期待されます。既製品ではなく、自分が見たい現象に合わせた、世界にひとつだけのデバイスを自分たちの手で生み出し、未知の領域を足もとから支える研究を進めています。



研究室で生まれた半導体チップ。
これよりも小さなチップも作られている。



Q2. どんな社会実装が期待できますか？

A 将来の通信で利用されるような高周波を通す・通さないといった機能を持つ部品の電界分布を観察できるデバイスを開発できれば、工場の製造ラインで多数の製品を検査し、評価する用途などに利用できます。また、生体内に埋め込んで神経活動などを観察することができるデバイスが開発できれば、病気の仕組みや薬の働きなどを評価する技術になります。さらに、カメラなどで撮影した画像をもとに網膜を電気刺激するデバイスを開発できれば、視細胞機能不全に起因する失明患者の方の視覚機能を補助する技術への応用も期待できます。

Q3. 研究室の推しポイントは？

A 何といっても自分たちの手で独自の半導体チップを作成できる環境が整っているところです。また、留学生が多数在籍しており、国際色豊かな研究室であるところも魅力のひとつだと思います。現在はタイや台湾からの留学生が多いですね。

Q4. 印象に残っている出来事は？

A 情報通信研究機構に在籍していた頃、非常に細かな調整を必要とする光学実験を行っていたことがあり、ある時、その調整中に一瞬だけ装置が光ったように見えました。もともと光らせようと思って行っていた実験ではなかったので、「なぜ光るのか」と思って、いろいろ条件を変えて試してみたらはっきりと光るようになりました。当初狙っていたこととは異なる現象の発見でしたが、この発見は論文発表や受賞にもつながりました。研究していると、計画通りに上手くいかず苦しい時もあるけど、こういうセレンディピティ（思いがけない発見）もあるから頑張ろうと思えます。



Q5. 研究に欠かせないお供は？

A お気に入りのキーボードです。高価なら良いというわけではなく、打鍵音が大き過ぎず、キーが浅過ぎないものが好みです。毎日使うものなので、静かさと押した感触がちょうど良いことを大切にしています。



先生愛用のキーボード

Q6. 今の自分に影響を与えた出来事や言葉は？

A 保育所に通っていた頃、保育士の先生から「理科博士だね」と褒められたことがあり、その一言から、自分は理科が得意なのかもしれないと思い、理系を意識する最初のきっかけとなりました。また、高校生の時に、数学のテストで満点を取ったことがありました。ちょうど文系・理系を選ぶ時期だったので、この出来事も、理系の道を選ぶ後押しになったと思います。

Q7. 行き詰まった時の気分転換は？

A 「行き詰まった時だけ」というわけではないのですが、温泉が好きで、故郷の新潟へ車で帰る途中、福井や石川の温泉に立ち寄ることもあります。（良いアイデアが浮かぶかどうかは別として、入浴中に研究のことを考えることも。）ただ、本当に行き詰まっている時は、お風呂に入っても、気持ちが落ち着かないし、疲れもとれません…。



和気あいあいとした雰囲気の研究室

Q8. 尊敬している人は？

A 尊敬しているのは両親です。大学に進学した親戚が多くない中、地元を離れ県外の大学へ進学したいと伝えると、私の意思を尊重して快く送り出してくれました。外の世界へ進む背中を押してくれたことに今も感謝し、尊敬しています。

Q9. 趣味は何ですか？

A 趣味は家庭菜園です。これまで、ゴーヤ、きゅうり、オクラ、さつまいも、にんにくなどを育ててきました。中でも、手間がかかりにくく、収穫後に焼き芋として楽しめるさつまいもは、初めて野菜を作る方にはオススメです。ただ、最近は栽培活動はお休み中です…これからまたやるかもしれません。



家庭菜園の様子。ゴーヤが豊かに実っている。



Q10. NAISTの良いところを教えてください。

A 規模が小さい大学なので、立場の違う人や研究分野の違う人とも比較的距離が近く、様々な垣根を越えてつながりをつくりやすいところです。また、入試ではペーパーテストの点数だけでなく、自分の強みや研究に対する意欲をアピールできる仕組みになっており、多様な背景や強みを持つ人が挑戦できるところも、NAISTの良いところだと思います。



岡田 竜馬

先端科学技術研究科
物質創成科学領域助教。
実は湯船につかりたい派。

研究室情報

先端科学技術研究科 物質創成科学領域
光機能素子科学研究室
物質創成科学棟F606

研究室ホームページ
https://mswebs.naist.jp/LABs/pdslab/index-j.html

研究室受賞紹介

2026年2月4日、第42回井上学術賞・井上研究奨励賞・第18回井上リサーチアウォード贈呈式にて、同研究室の岡田 竜馬助教が第42回井上研究奨励賞を受賞しました。本賞は、優れた博士論文を提出した若手研究者に対して贈られるものです。岡田助教の研究は、Beyond 5G/6G時代のミリ波～テラヘルツ波の電界分布をリアルタイムに可視化・評価する技術への貢献が期待されています。

NAISTの皆さんに聞いてみました！

私たちが好きな理由

Ranking 1位 研究環境が充実している /Excellent research environment

（設備･施設が充実している/Well-equipped facilities and campus resources）

建物が研究室向けに合理的に作られている。（教員）

充実した学内共用装置のおかげで、若手研究者にとっても、経験豊富な研究者にとっても、研究環境が整っている。（教員）

DXが進み、研究に注力しやすい環境だと思っています。（研究員）

高価な研究装置を学内で共同利用できるシステムが整備されており、
各装置には専門の技術職員が配置されているため、
効率的に研究を進めることができる。（職員）

I selected these items because my experience at the university has been very positive both academically and personally. The quality of education and research support has helped me develop my knowledge and research skills, and I have access to well-equipped facilities that support my studies.
（大学での生活が、学業面でも私生活の面でもとても充実していたため、これらの項目を選びました。質の高い教育や手厚い研究支援のおかげで、知識や研究スキルを高めることができました。また、学習や研究に必要な設備･施設も充実しており、恵まれた環境で学ぶ事ができています。）（学生）

Ranking 2位 多様な文化や価値観に触れられる /Exposure to diverse cultures and perspectives

留学生の比率が高く、キャンパスを歩いているだけでも多様な文化を感じられるため。（職員）

研究室では研究だけでなく、ラボメンバーとのコミュニケーションを通して様々な価値観や文化を学ぶことができているため。（学生）

自然豊かで四季を感じることができるし、海外からの留学生をはじめ、
教職員の方々も様々な経験を持った方が多く、刺激的なところだなと感じました。（職員）

国際色豊かであり、互いの違いを認める文化があると思う。（学生）

Ranking 3位 人間関係が良い /A friendly and supportive community

関わる人が皆素敵な人だと感じるから。（職員）

Participating in university club activities and community events has made campus life engaging, collaborative, and enjoyable.
（大学のクラブ活動や地域イベントに参加することで、充実した楽しいキャンパスライフを送ることが出来ています。）（学生）

第一線で活躍する研究者に囲まれ、自由に研究できる環境がある。NAISTは教員も学生も穏やかな人柄の方が多いように思う。（教員）

その他

・教員/事務職員/技術職員/大学院生が一丸となって最先端の研究をしよう！という校風。
フットワークが軽いのも良いところです。（教員）
・理系院生に特化したキャリア支援が受けられる。（学生）
・学内にオープンで自由な空気が流れていると感じました。（職員）
・就活の説明会を多数行っており、現在の内定先を応募するきっかけとなった。（学生）

＼＼ ご回答にご協力をいただいた皆様、誠にありがとうございました！ ／／



安定的な財政基盤の確立

本学では、教育・研究・社会貢献活動を持続的に発展させるため、健全な財務運営と、持続可能な財政基盤の構築を推進しています。運営費交付金に加え、多様な財源の確保や外部資金の獲得を積極的に進めることで、教育研究活動のさらなる充実を図っています。

収入財源の多元化に向けた取り組み

本学の収入は、主に運営費交付金・自己収入・産学連携等収入及び寄附金収入で構成されており、多種多様な財源で様々な教育研究活動等が実施されています。
収入の約半分は、現在においても国から交付される運営費交付金収入となっておりますが、第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけて多様な財源確保を目指した結果、2025年度と第3期中期目標期間初年度の2016年度を比較すると産学連携等収入の獲得額が約7億円増加しています。また、2025年度においては大型の補助金の採択により、受け入れ額が多額であったことから、一時的に収入割合の構造に大きな変化が生じています。
今後も、多様な財源の確保に取り組むことにより、第3期中期目標期間（2016-2021年度）における総事業規模（約560億円）を超える事業規模の拡大を目指します。

POINT

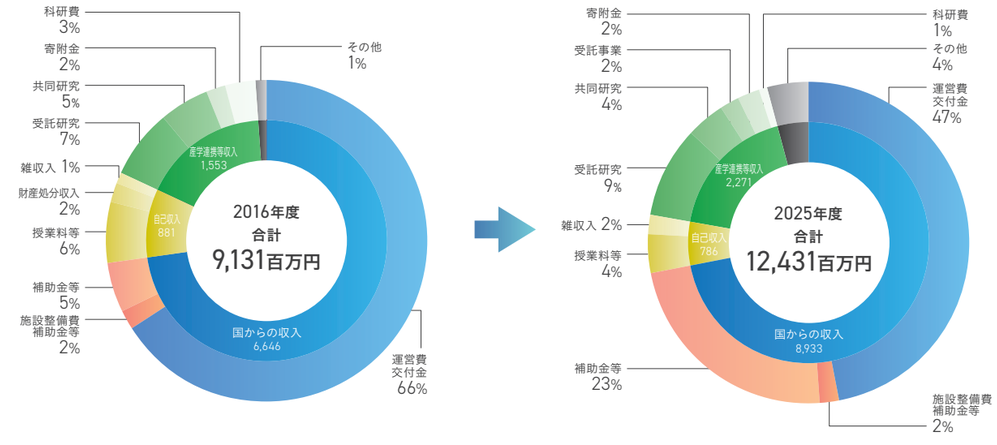
運営費交付金に依存した
収入構造からの脱却を目指し、
財源の多様化に向けて
外部資金の獲得拡大を推進

1 多様な財源の確保

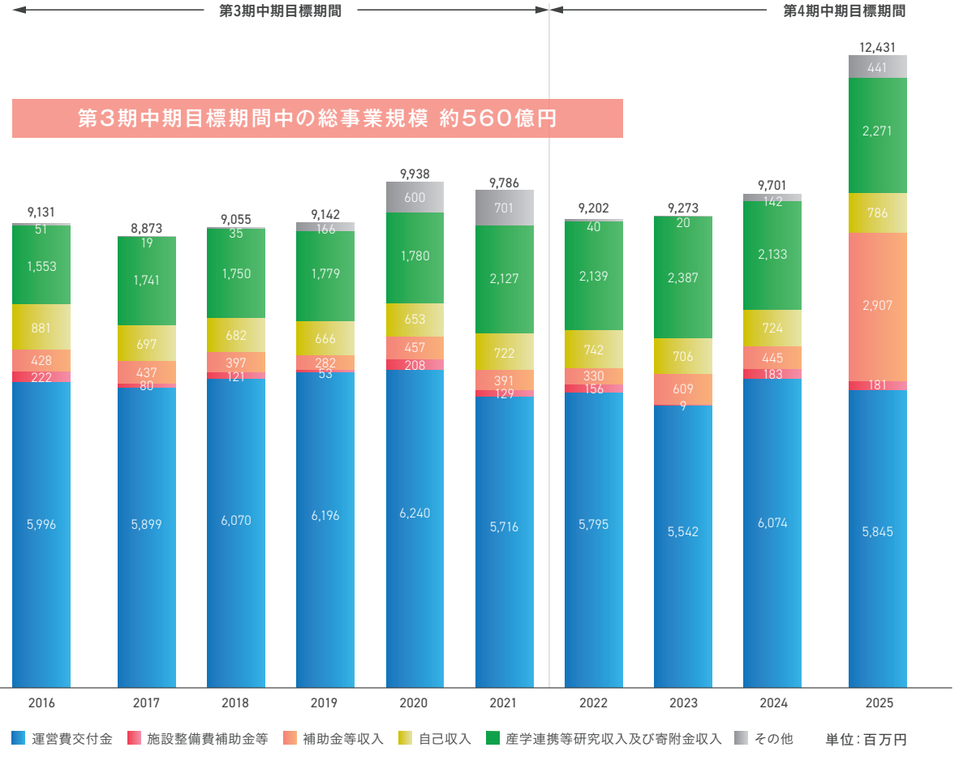
2 支出構造の最適化

3 持続的成長に向けた財務戦略

第3期中期目標期間初年度（2016年度）との収入構造比較



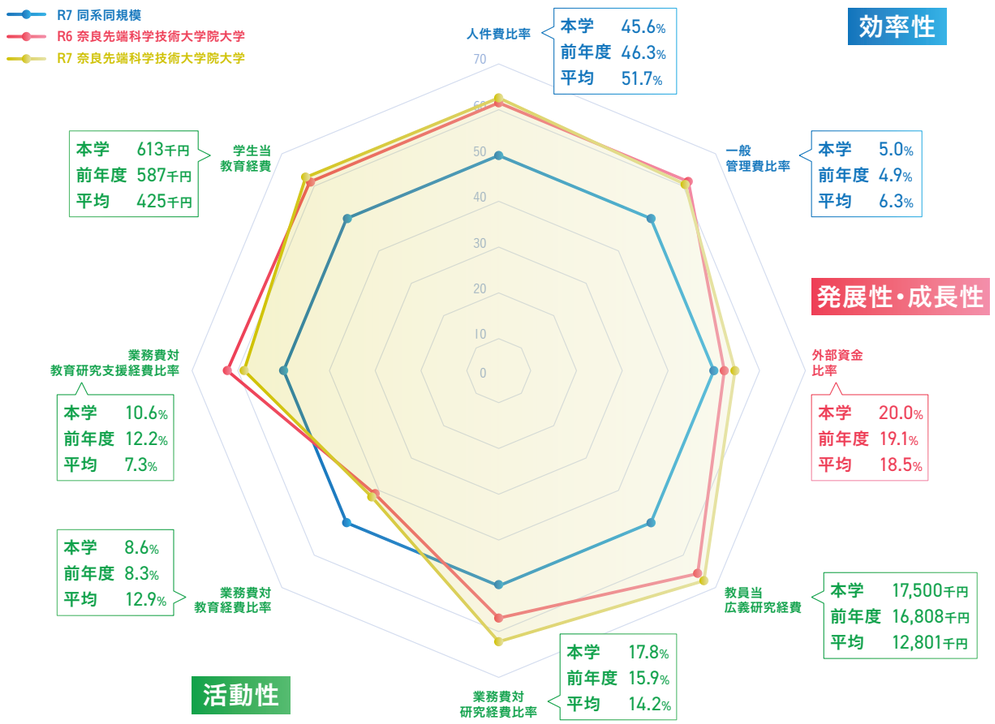
第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての収入構造の推移



財務指標

本学と同系同規模※の国立大学法人の各指標を偏差値化して平均を50とし、財務的な視点から他法人との各指標を比較した2025年度における本学の特徴を表したものです。他大学と比較して効率性の高い財務体質を実現しており、その結果、外部資金を含む研究経費の割合が高いことが特徴です。2025年度は、大型の補助金の採択や受託研究費・共同研究費等が増加したことにより、外部資金比率、教員当広義研究経費、業務費対研究経費比率が前年度より高い結果となりました。
また、業務費対教育経費比率、学生当教育経費についても前年度より高い結果となっております。
他大学との比較においては、効率性及び発展性・成長性を表す指標において優位性を持っていることを示しています。

※病院を持たない自然科学系大学で、規模や専門性が近いと考えられる以下の8大学を抽出。なお、平均値は、本学を含めた9大学の平均値。東京農工大学、電気通信大学、長岡技術科学大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学、九州工業大学、北陸先端科学技術大学院大学。

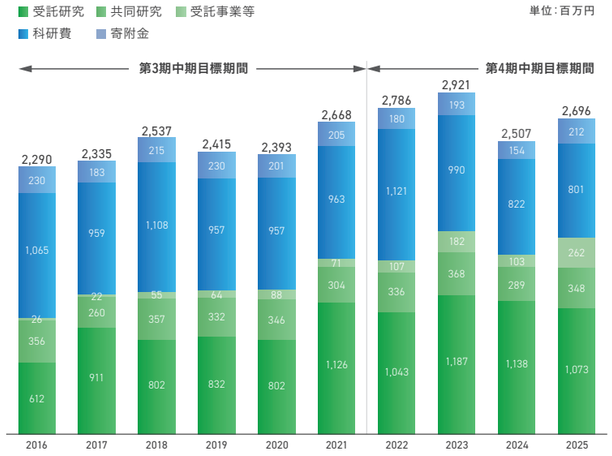


項目	説明	
人件費比率	人件費÷業務費	業務費における人件費の割合を示す指標（低いほど良好）
一般管理費比率	一般管理費÷業務費	業務費における一般管理費の割合を示す指標（低いほど良好）
外部資金比率	（受託研究等収益＋受託事業等収益＋寄附金収益）÷経常収益	経常収益に占める外部資金の割合を示す指標（高いほど良好）
教員当広義研究経費	（研究経費+受託研究費+共同研究費+科学研究費補助金等(直接経費)）÷教員数	教員一人当たりの広義の研究経費（研究経費、受託研究費、共同研究費と科研費直接経費獲得額の合計）を示す指標（高いほど良好）
業務費対研究経費比率	研究経費÷業務費	業務活動のうち、研究に使用される経費の大きさを示す指標（高いほど良好）
業務費対教育経費比率	教育経費÷業務費	業務活動のうち、教育に使用される経費の大きさを示す指標（高いほど良好）
業務費対教育研究支援経費比率	教育研究支援経費÷業務費	業務活動のうち、教育研究支援に使用される経費の大きさを示す指標（高いほど良好）
学生当教育経費	教育経費÷学生数	学生一人当たりの教育経費を示す指標（高いほど良好）

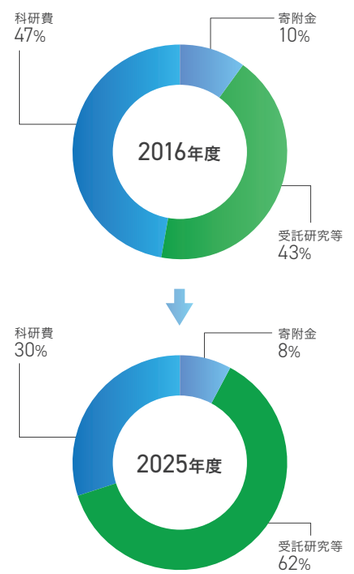
外部資金の獲得状況

学長ビジョン2030に掲げる「財源の多元化による財務基盤の安定化」の実現に向けて、受託研究費が引き続き第3期中期目標期間から大きく増加している一方、科研費の受け入れ額が減少傾向にあるため、財源のバランスが変化しています。

第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての外部資金獲得額の内訳推移



第3期中期目標期間初年度（2016年度）との外部資金獲得額の内訳比較



大学全体の収入と支出の現状

大型の補助金の採択や受託研究費・共同研究費等の増加により、費用・収益ともに大幅な増加となりました。
一方で、財政均衡化を図る各種施策の結果、管理的経費はほぼ横ばいを維持しており、この結果2025年度においては、約8.0億円の利益が生じました。当該利益は、次年度以降の事業の財源として活用できる目的積立金として申請し、施設整備等をはじめとした様々な事業を通じて今後の教育研究活動の推進に役立てる予定です。

POINT
財政効率化により管理的経費を抑えた結果、**黒字決算を維持**し、**教育研究環境の整備財源を確保**しました。

損益計算書（2025年度）

単位：百万円

費用の部	（R6年度）	R7年度	増減
経常費用			
教育経費	(671)	737	66
研究経費	(1,280)	1,537	257
教育研究支援経費	(980)	913	▲67
受託研究費等	(1,394)	1,500	106
人件費	(3,723)	3,927	204
一般管理費	(393)	431	38
その他	(33)	57	24
経常費用　計	(8,477)	9,105	628
当期総利益	(961)	800	▲161
合計	9,438	9,905	467

収益の部	（R6年度）	R7年度	増減
経常収益			
運営費交付金収益	(6,011)	5,792	▲219
学生納付金収益	(680)	725	45
受託研究等収益	(1,479)	1,640	161
寄附金収益	(313)	325	12
補助金等収益	(509)	928	419
科研費等間接経費	(180)	178	▲2
その他収益	(232)	240	8
経常収益　計	(9,407)	9,831	424
目的積立金取崩額	(31)	74	43
合計	9,438	9,905	467

※端数処理（切り捨て）に伴い、合計等は必ずしも一致しない。

資産等の現状

固定資産は、教育研究施設・設備の老朽化（減価償却）が新規取得額を上回ったことにより、前年度と比較して約2.7億円減少しました。一方、2025年度の当期未処分利益は約8.0億円であり、純資産は前年度と比較して約3.0億円増加しました。減価償却による老朽化等により教育研究活動が停滞しないよう、減価償却引当特定資産や目的積立金を活用しながら施設・設備の計画的な更新を進めてまいります。

POINT

大学全体としては建物等の老朽化が進んでいるものの、研究機器等の設備更新が行われている結果、大学全体の資産の老朽化率が抑えられており、**教育研究環境の維持につながっています。**

貸借対照表（2025年度）

資産の部	(R6年度)	R7年度	増減
固定資産			
土地	(9,276)	9,276	0
建物、構築物等	(9,357)	9,312	▲45
工具、器具及び備品等	(3,149)	2,954	▲195
図書	(447)	446	▲1
その他の固定資産	(496)	464	▲32
固定資産　計	(22,728)	22,455	▲273
流動資産			
現金及び預金	(4,718)	7,240	2,522
未収入金等	(121)	224	103
その他の流動資産	(39)	29	▲10
流動資産　計	(4,878)	7,493	2,615
資産　計	(27,607)	29,949	2,342

負債の部	(R6年度)	R7年度	増減
負債　計	(4,340)	6,384	2,044
純資産の部	(R6年度)	R7年度	増減
資本金	(18,624)	18,624	0
資本剰余金	(△978)	△988	▲10
利益剰余金	(5,620)	5,928	308
当期未処分利益	(961)	800	▲161
純資産　計	(23,266)	23,564	298
負債・純資産　計	(27,607)	29,949	2,342

※端数処理（切り捨て）に伴い、合計等は必ずしも一致しない。

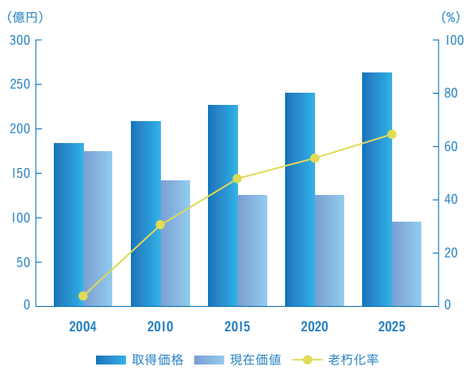
資産の構成

土地・建物・研究機器などの固定資産は、国立大学法人の使命である教育研究活動を行うための重要な基盤となっており、全体の75%を占めています。

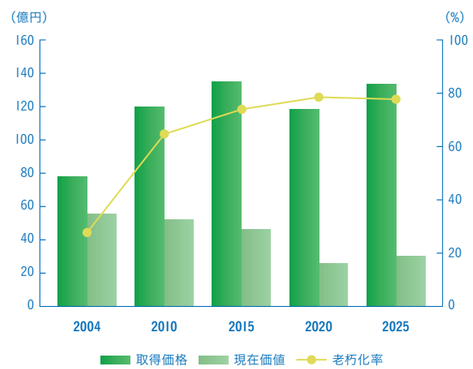


施設等取得額・老朽化率の推移

建物、構築物等



工具、器具及び備品等



奈良先端大における中長期的な財務戦略

中期目標の達成、中期計画の実施及び学長ビジョン2030の実現に向けては、中長期的に安定した財源の確保が重要な課題です。将来にわたり本学の使命を果たし続けるため、積極的な競争的研究費の獲得に加え、産業界や社会との連携を推進し、多様な財源の確保に取り組んでいます。また、資金獲得力の基盤となる教育研究環境の整備にも積極的に投資することで、財務体質の強化と新たな成長を生み出す好循環の実現を目指しています。

あわせて、向こう5年間を見据えた中長期的な財政シミュレーションを定期的に更新し、役員間で共有しています。これにより、中長期的な財務状況を俯瞰しながら課題やリスクへの認識を深めるとともに、中長期的な事業計画の策定はもとより、各年度における戦略的かつ計画的な予算編成に活用しています。

財務体質強化に向けた取り組み

収入獲得

- J-PEAKS（地域中核・特色ある研究大学強化促進事業）をはじめとする大型補助金獲得による教育研究基盤の強化
- 専門人材を活用したブランディング強化によるステークホルダーからの支援の拡充
- 課題創出連携研究事業実施や共同研究室設置による産学連携の推進
- サポーター組織（奈良先端大サポーターズクラブ）による寄附金獲得強化
- ネーミングライツの拡充による民間資金の活用

支出管理

- 学長ビジョン2030実現に向けた重点配分や成果を踏まえた戦略的予算編成の実施
- 経常経費を含めたあらゆる経費の予算配分スキームの見直し
- 中長期的な研究設備更新プランに基づく計画的な予算配分
- 計画的な施設改修と節電WEBを活用した省エネ機器の導入推進

小谷 直和 財務担当理事に聞く

奈良先端大の財務状況について



理事・事務局長
ダイバーシティ&インクルージョン推進室長。
実は飛行機には乗りたくない派。

このレポートをお読みいただきました皆様に感謝申し上げます。

本学の2025年度決算の概要は、経常収益98.3億円に対し経常費用91.1億円で経常利益7.3億円を確保し、目的積立金取崩額を含む当期総利益は8.0億円となり、黒字を維持しました。純資産も約3億円増の235.6億円となりましたが、多くの国立大学と同様、その多くは土地・建物等の固定資産です。実際に事業運営に充当できる流動資産は74.9億円、これに対し流動負債は54.3億円、差引の手元余力は約20.7億円、事業費換算で2～3か月分にとどまり、決して余裕ある財政状況ではありません。

続いて、決算から見える本学の運営状況をご紹介します。物価高騰の中、運営費交付金は伸び悩んでおりますが、本学では学生納付金を20年以上据え置きつつ、2025年度は奨学費が約7千万円増の4.3億円となりました。また、学生・教員の研究活動を支える全学情報環境について、約3億円増の6.6億円の債務負担行為を行い、4年間合計19.2億円を投資するなど、他の国立大学と比べても際立った教育研究環境の充実に努めております。

今後も限られた財源の中で着実な大学運営と外部資金の獲得に努め、教育の機会均等とトップレベルの研究成果の創出という国立大学の使命を果たしてまいります。

なにとぞ、本学へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

NAISTを応援するカタチ

本学では、教育・研究活動や人材育成について、さらなる発展をめざし、多くの皆様からのご支援をいただきながら様々な取り組みを進めております。ここでは、本学の未来を支えていただける応援のカタチをご紹介します。皆様のあたたかいご支援をお待ちしております！

01 奈良先端大基金

https://www.naist.jp/kikin/

「奈良先端大基金」は、世界トップレベルの教育研究拠点の形成に向け、本学における教育研究、社会貢献及び国際交流の一層の推進並びに教育研究環境の整備充実を図ることを目的とした基金です。基金の使途を絞らずご支援いただくことも可能ですが、「修学支援事業基金」、「研究等支援事業基金」、「グローバル未来人材基金」、「保育所事業基金」といった、特定の事業に係るご支援が可能な「特定基金」もございます。





咲いてく保育園の子どもたち。留学生の子どもも多く在籍し、小さな多様性ある社会が生まれている。

安心して学び、働き
子どもたちが
健やかに育つために

PICK UP!

保育所事業基金

「特定基金」のひとつである「保育所事業基金」は、大学内に設置された保育所「奈良先端大 咲いてく保育園」のための基金です。この基金は、子どもたちが安心・安全に過ごすことができる保育所の運営のために、整備や維持の一部に活用させていただきます。

ドネーションツリー（寄附の木）

ご寄附いただいた方々のお名前を記銘するドネーションツリーを、保育所の玄関に設置しています。大学構内の木々の葉っぱ（カエデ、シイノキ、コナラ、クヌギなど）と生駒市高山地区に生息する小動物や鳥たち（リス、ウサギ、フクロウ、タカ、キジなど）に模したパーツにお名前を印字いたします。



保育園の玄関を彩るドネーションツリー。
2025年度は新たにリスとウサギが仲間入り。

02 奈良先端大サポーターズクラブ

https://www.naist.jp/naist-supporters-club/



大学内にある学生宿舎。宿舎へ入居することで、学生たちの十分な研究時間の確保と経済的な負担の軽減の一助となっている。

「奈良先端大サポーターズクラブ」は、本学の優秀な人材の育成を安定的に継続し、さらに発展させるためにその一助として設置されたクラブです。
会員の皆様には会費として「奈良先端大基金」にご寄附をいただき、その基金によって本学の人材育成（奨学支援、修業環境整備、海外派遣をはじめとする研修プログラムなどの充実）を行っています。
また本会は、会員の皆様と大学、さらには会員間の連携を促し、交流や親睦、共創による相互の発展を目的としています。大学のリソースをご活用いただくための会員専用の相談窓口の設置や成果報告会の開催、各種行催事へのご招待など、双方向のコミュニケーションを活性化することで、社会との間に「共創の輪」を広げていきたいと考えています。

未来を担う
人材育成と
共創による
発展を目指して

サポーターズクラブのロゴマーク

学生宿舎のエアコンを更新！

学生の修業環境整備のため、2025年度、サポーターズクラブの会費を活用し、学生宿舎のエアコンを10台更新しました。

03 ふるさと納税

https://www.naist.jp/about/furusato/furusato.html

2025年度より生駒市のふるさと納税の使いみちに、「奈良先端科学技術大学院大学への支援」が追加されました！
ふるさと納税を通じてご寄附をいただいた金額のうち、生駒市での必要経費を除いた金額が補助金として本学に交付されます。この補助金は、生駒市内をはじめとした住民の方々へ、先端科学技術に関する教育の実施や地域の発展に活用させていただきます。



返礼品には、入手困難な幻のレインボーラムネをはじめ、生駒で採れたはちみつ山桜、奈良生まれのいちご古都華など、奈良の魅力的な名品を選ぶことができる。



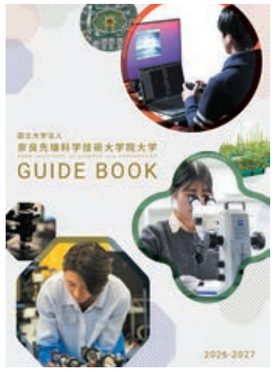
研究成果がお酒に

本学と奈良県産業振興総合センター（現・奈良県工業振興センター）との共同研究により育種したオルニチンを高生産する酵母「オルニチン酵母」で仕込んだお酒「往馬」も返礼品として選ぶことができます！古の時代から受け継がれてきた清酒づくりと、本学の最先端の酵母研究を融合させた味わいが楽しめます。

酵母の開発には本学の髙木 博史特任教授が関わった。

奈良の名品を
味わいながら
支える

Publications



\\ 2026-2027版最新号 //

NAIST GUIDE BOOK

https://www.naist.jp/publications/guidebook/files/2026_guidebook.pdf

\\ 2026-2027版最新号 //

NAIST GUIDE BOOK
English Version

https://www.naist.jp/en/campuslife/#guidebook





広報誌せんたんWEB

https://www.naist.jp/publications/sentan/WEB/

奈良先端大公式HP

https://www.naist.jp/

アニュアルレポートに関する
ご意見・ご感想は
こちらから！

https://ssl.form-mailer.jp/fms/eddc894a837151

アニュアルレポート制作ワーキンググループ

武岡 和弥

会計課決算係。
実は旅行は国内派。

今井 杏

企画総務課企画･法規係主任。
実は季節は夏派。

関 恵

企画総務課企画･法規係。
実はキャラクターものに弱い。

亀井 克弥

学術情報課情報企画係。
実はコーヒーには牛乳たっぷり派。

丸 亜里

学術情報課電子図書館係。
実は水族館派、大型の生き物が好き。



editorial note

編集後記

この度は「NAIST ANNUAL REPORT 2026」をお読みいただき、誠にありがとうございます。
本レポートは、本学事務職員の主任･係員を中心とした有志による「アニュアルレポート制作ワーキンググループ」が企画･作成しており、今回で 3 回目の発行となります。今年度は、初めて制作に携わる 5 名で取り組みました。

今回の制作では、「よりわかりやすく伝えること」を大きなテーマとしました。そこで、「人」を一つの入口として、本学の研究や取り組みに興味を持っていただけるよう、内容や構成に工夫を重ねました。
少人数で、通常業務と並行しての制作ではありましたが、何度も意見を交わしながら、よりよい一冊となるよう制作を進めました。

本誌が、2025 年度の本学の取り組みを振り返っていただくとともに、奈良先端大をこれまで以上に身近に感じていただく機会となれば幸いです。
今後とも、本学へのご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

special thanks!

本誌の制作にあたり、本学の事業内容についてご教示いただいた方、原稿の作成や確認、
誌面構成の検討にご協力いただいた方、取材や撮影にご協力いただいた方、
アンケートにご回答いただいた教職員･学生の皆様、過年度の制作経験をもとに助言をいただいた方など、
多くの方々にお力添えをいただきました。
また、本誌の制作に携わるにあたり、所属する係の皆様には日々の業務において様々なご配慮とご協力をいただきました。
さらに、学外の関係機関の皆様には、掲載内容のご確認や、記事･写真の掲載についてご快諾いただきました。

本誌の制作にご協力いただいたすべての皆様に、改めて心より御礼申し上げます。



※本レポート内で紹介している記事やデータは、主に 2025 年度のものですが、一部には 2026 年度の出来事も含まれています。※所属は取材時のものです。

Nara Institute of Science and Technology
NAIST

国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学
NARA INSTITUTE of SCIENCE and TECHNOLOGY

〒630-0192　奈良県生駒市高山町8916番地の5
TEL 0743-72-5111(代表)

